



詩篇第4巻

詩篇90-106篇の配列構造

詩篇第4巻 90-106

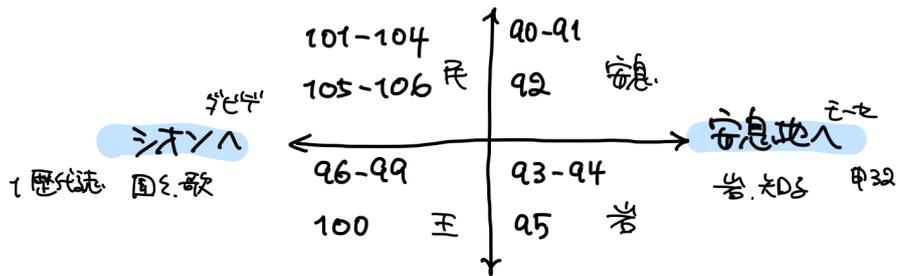
岩なる王が民をつくる
あけぬき、あはぶき

2018.4.18

民を祝福、主を祝福

主の名(あけぬき)をほめよ P-X(?)

主のあはぶきとあはぶきをほめよ 1411P(?)



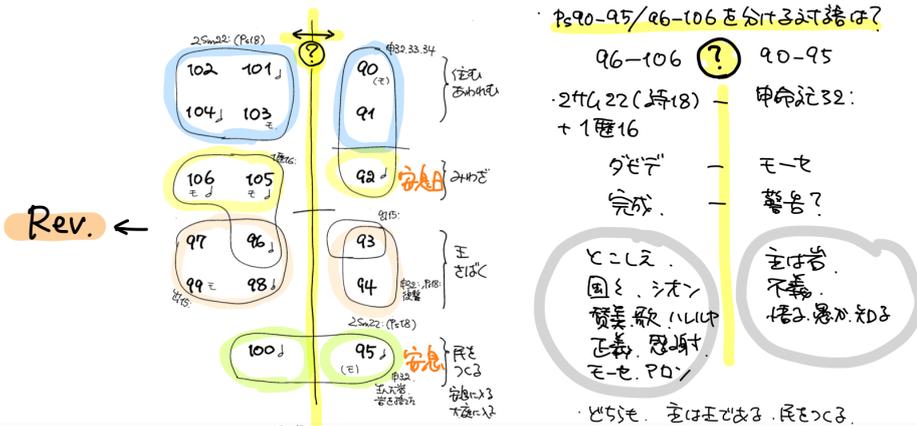
主は王となった 救者
主は民となった 羊

王と民と岩

詩篇第4巻。90篇から106篇の配列を分析をしました。岩なる王が民をつくる。4つの巻物の4番目。最初が主は岩である。次が子が王となる。子が住む神殿が建てられ、民が神様の民としてつくられる。これが、第4巻の大きなテーマになります。

詩篇第4巻 90-106

2018.4.5



4つに分けるのですが、いろいろ思い出さないといけない聖書の箇所がありますけれど、大きく、申命記32章。カナンの地に入っていく前のモーセの相続のことば。それと、第1歴代誌16章。ダビデが契約の箱をシオン、ダビデの町に持ってきて、ダビデの天幕に安置したという第1歴代誌16章の歌。

その第1歴代誌16章を引用して105篇、106篇、96篇ができているのだらうと思います。もしくは、もともと105篇、106篇、96篇の詩篇があって、それをダビデが組み合わせ、契約の箱が入ったときに歌ったのか。いずれにしろ、その箇所を連想するように言われています。

それと、主は王であるという言い方が出てくる特徴がある詩篇が、96篇、97篇、98篇、99篇という似ているもの。これが、4つ組(セット)になっているのがわかるような詩篇が並んでいます。「新しい歌を主に向かって歌え」「新しい歌を主に向かって歌え」「主は王となった」「主は王となった」という4つの詩篇。それと、ちょっと前のところで、93篇も「主は王となって」というところで始まっています。この「主は王となる」というのが、出エジプト記15章のモーセの歌の最初の歌です。エジプトから連れ出されたときのモーセの歌という歌を歌いましたということが書かれている、この箇所も思い出さないとはいけません。

それと、とりなしの祈り。金の子牛の事件のあとに、モーセがとりなしの祈りをしたときに、神様をご自分の名をあらわしてくださった出エジプト記の33章、34章。「主は憐れみ深い」という宣言の箇所も思い出さないといけないということです。

モーセの歌というのは、90篇の出だしについていますけれど、これは、確かではありませんが、モーセの歌と言われている伝統は妥当な感じはします。モーセと人物がそのまま入っている詩篇が、103篇、105篇、106篇、99篇。「モーセ、アロン、モーセ、アロン」と言って、モーセが出てくる詩篇が並んでいる。95篇は、モーセのときの40年の間のことを直接言っていますから、これは、モーセのことを思い出すということです。

申命記32章、33章、34章、出エジプト記15章、第1歴代誌16章、それと、申命記の32章を思い出すように書かれている詩篇18篇。詩篇18篇は第2サムエル記22章にあるところですが、サウルから連れ出された日に歌ったダビデの歌。これは、ダビデが死ぬ前に書いた歌のように記録されています。モーセの申命記32章と同じような位置付けの場所の詩篇ですので、その箇所も見るということで、あちこち見ないといけなくて、その見る箇所は、あとでもう一度確かめましょう。

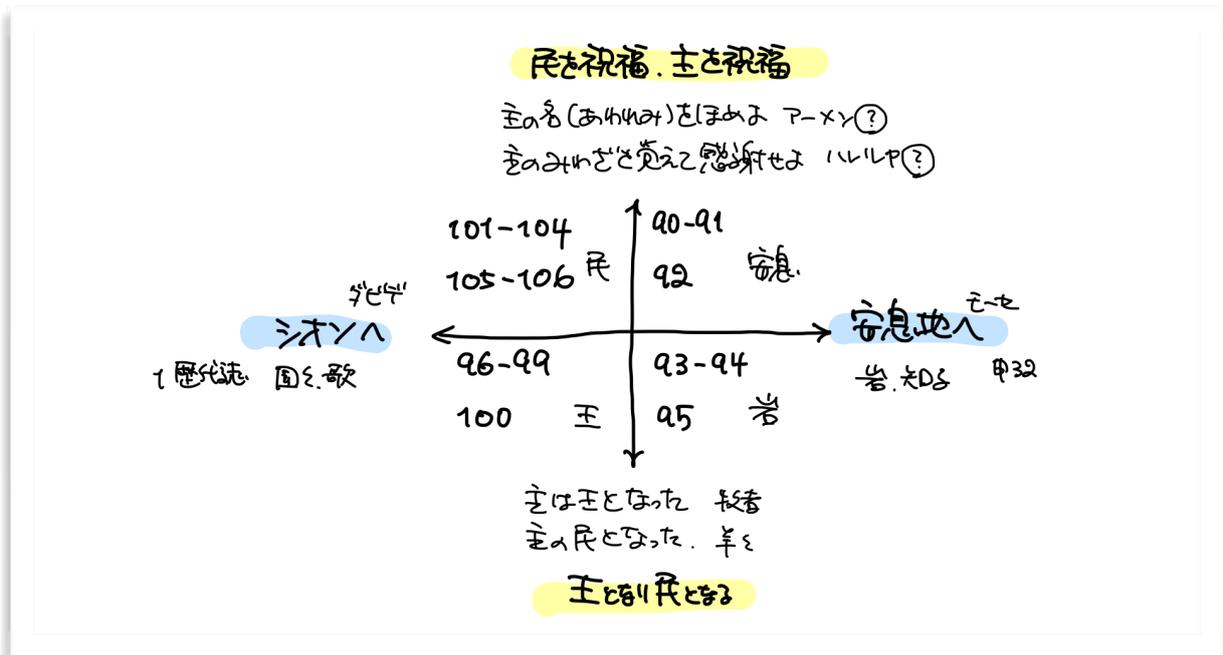
大きな区分で、4つに分けていますが、この区別をするときにわかりやすいところでは、95篇と100篇が似ています。「主にむかって歌い、喜ばしい声をあげよう」と言っている出だし。そして、「主は民を造って、主のもの、牧場の民、その御手の羊である」という、羊の大牧者である岩なる牧者が民を造りましたという95篇と100篇が似ています。

それと93篇の主は王であるということと、先ほども言っていた96篇、97篇、98篇、99篇がセットで、主は王ですと言われているところ。

105篇、106篇は、少し長めです。これも書き方が似ています。歴史を書いて、主をほめたたえる、主に感謝するという詩篇で、この2つは似ています。

103篇、104篇も、「わがたましいよ、主をほめたたえよ」「わがたましいよ、主をほめたたえよ」というところで終わる詩篇として、これも、長さも形も似ているようなことがありますので、その形がわかりやすいところをグループにしていくわけです。

そうすると、大きく95篇までと、それ以降ということ、2つに分けられるだろうということ。93篇から100篇までが1つだと分析する人たちがいますが、それは、後半が一つの段落になっていると見てるとのことだと思います。



90篇から92篇、93篇から95篇、96篇から100篇、101篇から106篇。この4つに分かれているのですが、それぞれが、2つに分かれています。2つに分かれていることは、あとで見ますけれど、2つにわかれているものを、まずは一緒にして、4つに分けたときのつながりというものをしているのがこの図です。

90篇から95篇までは、特に、主は岩である。その岩なる神様が、モーセのときのように安息の地に導いているというのが、この95篇までの大きな共通点。

96篇から106篇までは、シオンということばもたくさん出てきますけれど、ダビデがシオンに契約の箱を持って行って新しい時代が始まるというところ。こちらは、国をつくる。国をつくって王が、全世界の王となっているという歌を歌っているというようなことで、グループになると思います。

安息の場所へ(90-95)、そして、安息の国がつくられる(96-106)。そして、さらには、モーセの歌というのが黙示録15章に出てきます。そこで、申命記32章が引用されたりしますので、安息の地、シオンの山、さらには、新しい天と地、新しい歌、本当の新しい歌を歌うところ。この神様の民が完成する。妻となって栄光をあらわすこの黙示録につながっていくその流れです。場所として、そして、国としてという前半(90-95)、後半(96-106)の違いがあるだろうと。

その安息の地に導く、安息というのはどういうものなのかというのが、90篇から92篇。安息に導く岩なる牧者はどういうふうに通しているのかが、93篇から95篇。96篇から100篇は、主が王となりました。国々の上に高く上げられる王となりました。そし

て、民を憐れんで平和に導くという(101篇から106篇の)4つの段落に分かれていると思います。

特に、90篇から92篇、101篇から106篇。このところは、神様が民を祝福する。主は私たちを憐れんでくださる。その名をあらわしてください。その名をあらわしてください名に、相応しい導きをみわざをなして、導いてくださったことを覚えて、主に感謝する。これが、2つのところの流れであろうということです。

下の93篇からのところ、こちら側の2つ(93-95,96-100)は、主は王となった。そして、主の民となった。牧者となって羊たちをつくりました。導きました。これが、後半のほうです。そして、民を祝福し、主を祝福する。(主をほめたたえるというのは、主を祝福するという事です。)民を祝福し、主を祝福するという祝福の関係。王となり、民となるという契約の約束の成就。契約の約束が成就したことを覚えて、「アーメン、ハレルヤ」と言って、賛美するということにもなるかと思えます。

歴代誌 I 16, 18

16
 1. かくして、彼らは、神の箱を運び、
 2. だみ、ダビデがそのために張った天
 3. 幕のいけにえ、神のいけにえをささ
 4. げ終えてから、主の名によって民を祝福した。
 5. 3. そしてイスラエルのひとりひとりみな、男にも女
 6. にも、それぞれ、丸型のパン、なつめやし、菓子、干
 7. し、ぶどうの菓子、分け与えた。
 8. 4. それから、レビ人の中のある者たちを、主の箱の前
 9. でたえさせ、イスラエルの神、主を覚えて感謝し、ほ
 10. めたたえるようにした。
 11. 5. かしらはアサフ、彼に次ぐ者は、ゼカリヤ、エイ
 12. ル、シメヨ、エドム、エイエル、マティヤ、エリアブ、
 13. ベナヤ、ヘベド、エドム、エイエル、彼らは、
 14. や、立券などの楽器を携え、アサフはシンバルを響か
 15. せた。
 16. 6. 祭司、ベナヤとヤハジエルは、ラバを携え、常に神
 17. の契約の箱の前にいた。
 18. 7. その日、その時、ダビデは初めてアサフとその兄弟た
 19. ちを用いて、主をほめたたえた。

主
 主(abb)E H1984 halal
 覚る. 感謝. 賛美 (祝福)
 歌
 立券 シンバル
 箱
 民
 イスラエル
 祝福 Gen1:-2: 7
 H1288 barak 7
 (75:18) 7
 106:48 7
 3:23:1 H5117.5118 nuwach
 13:1 5:3-4 (13:18. 2(6:4))

主の名: あひあひ. さばき
 救い出さ. 救い入さ.
 牧者が善き. 住まわさ. 安息を与さ.

民を祝福し、主を祝福するというのは、第1歴代誌16章のダビデの歌が記録されている前の段落、歌う前のところに、運び入れたときにどうしたかという箇所があります。1節から7節のところです。

その箇所を見ると契約の箱が幕屋に入ってきましたというときに、まず、いけにえを主に捧げると、ダビデは主の名によって民を祝福します。

そして、ダビデは民に輪型のパンと果物の入っているお菓子、甘いものを与える。すると、与えられた民は主を覚えて感謝してほめたたえる。

主の名によって祝福される。主の名をほめたたえるという応答。それと、主に捧げると、主が与えてくれるという関係。

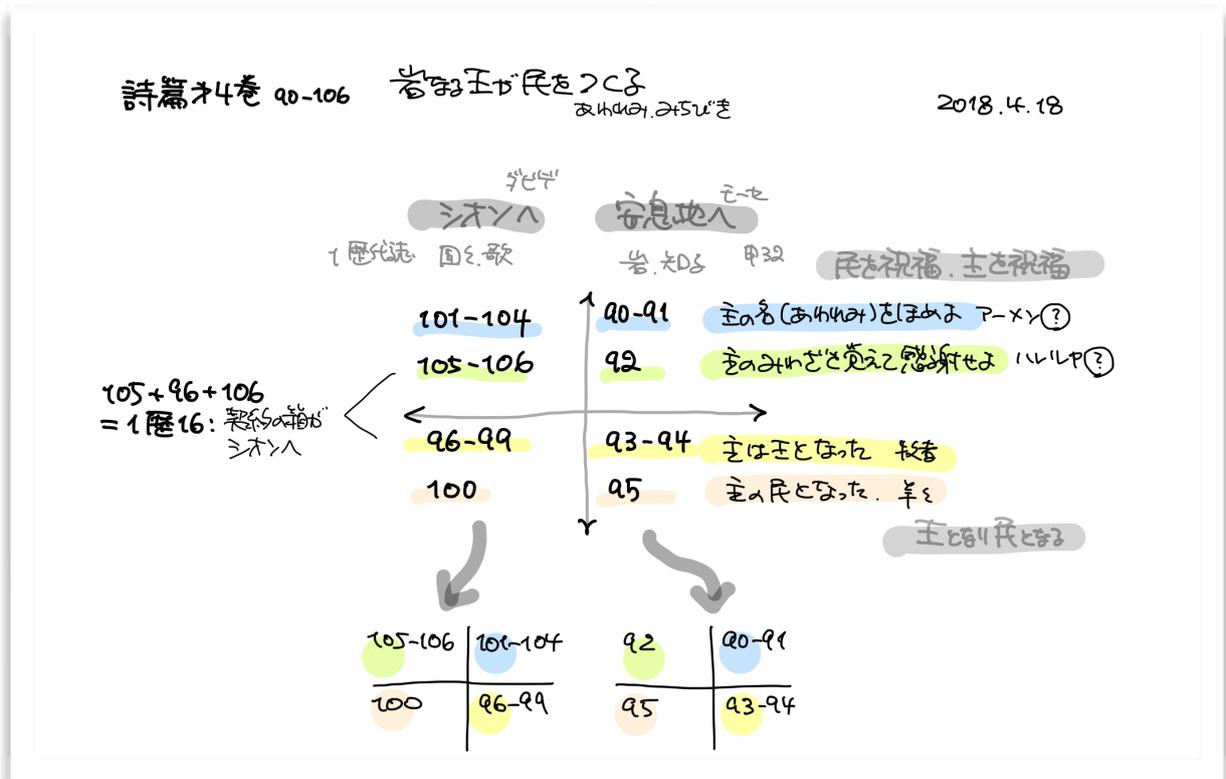
ここでは、楽器を使いますが、民は、立琴、シンバル、ほめたたえる。祭司はラッパを吹いて民を導くという、主と民の関係がここで言われています。

その主の名、あわれみ深いさばきをしてくださる主が救い出してくださった。そして、その民を導いて住まわせて、安息を与える。休みどころに入ってくださった、その幕屋に王座が安置されるのと、民が安息に入れられるのがオーバーラップしている。同じことを別の面から言っているようなものなのだと思います。契約の愛の一致、応答があるということがありますので、

そのことが、90篇から92篇、101篇から106篇のところ、特に強調されている関係ではないかなというように見ました。

王となり民となるというところは、アブラハムの契約やダビデの契約もそういうことになります。神様と民がひとつになるという約束が与えられていますので、そのことが特にあらわされて、全体の中心にあります。外側、中側、中側、外側という順番です。その王となり民となるというのが、この契約の愛をあらわす言い方ですということが言えると思います。

モーセの安息に入れる、岩なる牧者が安息に導く(90-95)、その牧者が全世界の王となって(96-100)、民を安息に入れる(101-106)、シオンに住まわせるというのが、全体の流れだと思われます。



この中が2つずつに分かれていますので、その2つずつを見ると…というのが、次の紙です。横に似ていると言っています。この最初の4つの段落と、次の4つの段落が、実は同じ構造になっているのではないかとというのが、この図です。90篇から91篇と、101篇から104篇。92篇と105篇、106篇。93篇、94篇と96篇から99篇。95篇と100篇。これが、同じ位置付けで、2つの安息の地へ、シオンへということをこの4つの段落で見ている。

岩なる王が民をつくる時に、「あわれむ」ということと、「みわざによって導く」という2つによって、「民がつくられる」ということをあらわしているのが、第4巻のこのような構造のところでわかるのかなと思います。王のみわざ、勝利、王座が安息の場所に入ってくる。王座が安息の場所に入ってきたら、民は安息に住む。安息を与えられたシャロームの民となるということがわかるということだと思います。

全体の第4巻の配列は、4つに分けた中が、また4つに分かれて、アーメンとハレルヤということが、全体としてよくわかるように書かれているのだろうと思います。